

文部科学省

「地域社会に根ざした高等学校の

学校間連携・協働ネットワーク構築事業

(COREハイスクール・ネットワーク構想)」

令和5年度 成果報告書

愛知県教育委員会

1. 事業概要

1.1. 本事業に取り組む課題と目的

県内の2022年3月時点の中学校卒業生数は約7万人であるが、2035年度3月時点では1万3000人余り減少し、約5万7000人となると予測している。本事業の構成校は、いずれも中山間地域や半島の先端に位置する高等学校で、入学の募集定員は全て80人以下という小規模の高等学校であるが、特にこれらの高等学校では小規模化の影響を大きく受けることになる。現在も、域内のさまざまな生徒層を受け入れ、大学進学から就職までの多様な進路希望に応じた教育・支援を行うという役割が期待されているが、学級数や生徒数の減少に伴って、これまで行ってきた進路希望に応じた科目開設や習熟度別指導の実施など生徒の多様なニーズの全てに対応した指導体制を各校単独で確保することが困難となってきた。

また、地域連携の取組は、それぞれの高等学校で進んでいるが、教育課程外のイベント的な取組が多く、教育課程に組み込まれた教育活動とはなっていない。

こうした課題に対しては、地域社会との連携・協働によって当該地域ならではの組織的・計画的な探究的な学びを実現するとともに、遠隔授業も実施したり、複数の高等学校が教育課程の共通化・相互互換を図ったりするなど、さまざまな教育資源を共用することによって、小規模高等学校単独ではなし得ない特色・魅力ある教育に取り組む必要がある。本事業では、遠隔授業の運営体制の確立とコンソーシアムの構築をととした系統的、継続的な地域連携によって、生徒の多様なニーズに対応した指導体制の確保と、学校の一層の魅力化・特色化を目的として研究を推進する。

1.2. 本事業を通して明らかにしたい事項

(1) 遠隔授業について

①「教科・科目充実型」の遠隔授業などICTも活用した連携・協働の取組

(受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。)

遠隔授業の実施について、内海高等学校については、生徒の興味・関心に応じた多様かつ質の高い教科・科目開設(地元資源である観光業に関する学校設定科目等)を目指す。構成校6校に共通することとしては、免許外教科担任制度の利用解消及び地歴、理科に関しては、専門分野以外の教科担任解消を目指す。いずれにおいても、生徒の多様なニーズに応えること、及び受信校の教員の負担軽減を図ることを目的とする(表1)。

高等学校名	科目開設や習熟度別指導の現状または要望
内海	地元資源である観光業に関する学校設定科目等の開設を要望
加茂丘	理科、地歴、情報の専門教員の不在
足助	地歴、理科の専門教員の不在
福江	情報の専門教員の不在
新城有教館作手校舎	地歴、理科の専門教員の不在
田口	地歴、理科の専門教員の不在

表1 科目開設や習熟度別指導の現状または要望

本県では、総合教育センターからの集中配信方式で遠隔授業を行う。その上で、効果的かつ円滑な遠隔授業を行う体制の確立を研究する。

②遠隔授業を行う運営体制の確立

遠隔授業を実施する際には、授業者と受信校との綿密な打合せやICT機器トラブル等について使用の支援が必要となる。また、本事業では免許外教科担任制度の利用解消等、受信校教員の負担軽減を図ることも目的としており、本事業をとおして、管理機関の適切な支援体制について明らかにする。

遠隔授業を実施する上では、その趣旨を理解し、オンラインでも効果的な授業を実施することのできる授

業者が必要である。また、本県では、総合教育センターからの集中配信を行うため、受信校の授業時間に総合教育センターへ継続的に赴くことができる必要がある。本研究において、授業者を確保する方法についての標準化を図る。当面は、高い専門性を有する退職校長などを非常勤講師として任用し、総合教育センターの研究指導主事がサポートをしながら、持続可能な任用の在り方について検証する。

③多様な学びの質の保証と学校間配信

生徒の多様なニーズに対応するため、総合教育センターからの集中配信だけでなく、学校間の相互配信によって多様な学びを確保する。特に、「観光」という共通したテーマの学びを進める構成校3校（内海高等学校、足助高等学校、福江高等学校）同士がコンソーシアムを構築し、相互配信を行うことで、学びの質の向上及び教員の負担軽減の可能性について検証する。

現在、福江高等学校と足助高等学校において観光ビジネスコースを設置している。内海高等学校は、地元の観光資源を生かすため、観光に関する学校設定科目等を編成している。令和4年度までには、先行して福江高等学校と足助高等学校の2校間で相互配信の取組を行い、内海高等学校は試行的に参加をする。令和5年度に3校間での相互配信を本格実施し、その効果を検証する。（図1）。

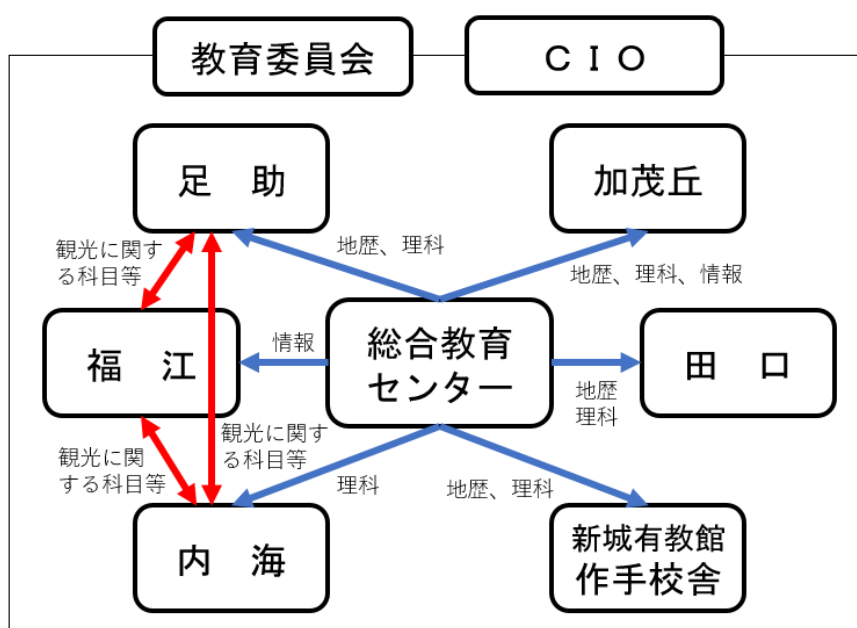


図1 遠隔授業の全体図

遠隔授業では、授業者が受信校の生徒の活動を直接に観察することができないため、学習の見取りを適切に行う必要がある。受信校の職員との連携の在り方や、ICT機器を活用した学習評価の充実についても研究を進める。

(2) コンソーシアムについて

地域連携の取組は、これまでもそれぞれの高等学校で進めてきているが、イベント的な取組とするのではなく、継続的な連携体制を構築する必要がある。また、構築における成果は他校でも適用できるようにする必要がある。

①コンソーシアムの構築・運営

ア 構築手順の標準化

今までそれぞれの高等学校で行ってきたコンソーシアムの構築及び地域連携について、その手順を標準化することで、構成校以外の高等学校にも適用できるようにし、各校の小規模化に対応できるようにするだけでなく、一層の魅力化・特色化を図るための知見を得る。特に、コンソーシアムを持続的なものにするために、各学校が地域から一方的に支援を得るのではなく、地域と学校が相互に利点を得られる仕組みづくりを模索する。

イ 管理機関の支援体制の在り方

教育委員会、総合教育センター、構成校、CIOで構成する事業推進連絡協議会において、事業全般についての進捗状況の報告、課題・問題点の検討、改善策の提案などを行いながら適切な支援の在り方について検討する。

コンソーシアム構築時、連携開始後において、活動が円滑に進むために行う管理機関の支援の在り方を見出す。また、地域からの人的、物的、金銭的な支援増加の方策について検討する。

②連携による学びの充実

ア 教育課程内の取組の充実

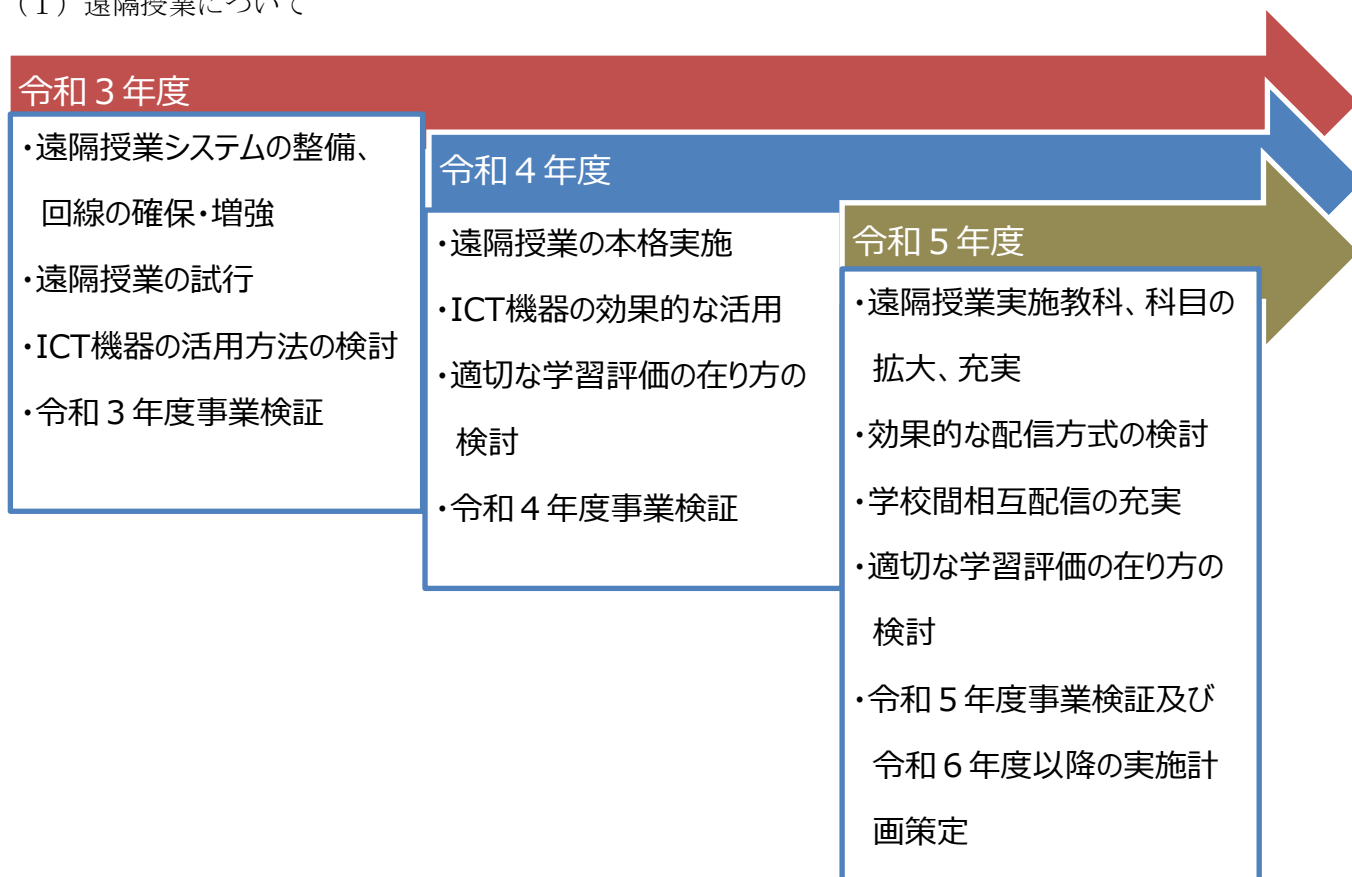
今まで行ってきた地域連携では、教育課程外で行うものが多かったが、教育課程内での取組の充実を図ることで、生徒の学習意欲や学びの質の向上を図る。

イ 構成校同士のコンソーシアム化による充実

本事業の構成校6校のうち、3校が「観光」をテーマとした学びに取り組んでいる。それぞれの学校が地域の公的機関等とコンソーシアムを構築しているが、3校が相互にそのコンソーシアムに加わることで、学びの深化を図る。また、地域との連携で得られた各学校の知見を相互に共有することで、3つのコンソーシアムによる上層的かつ大規模なコンソーシアム構築の可能性について検討する。

1.3. ロードマップ

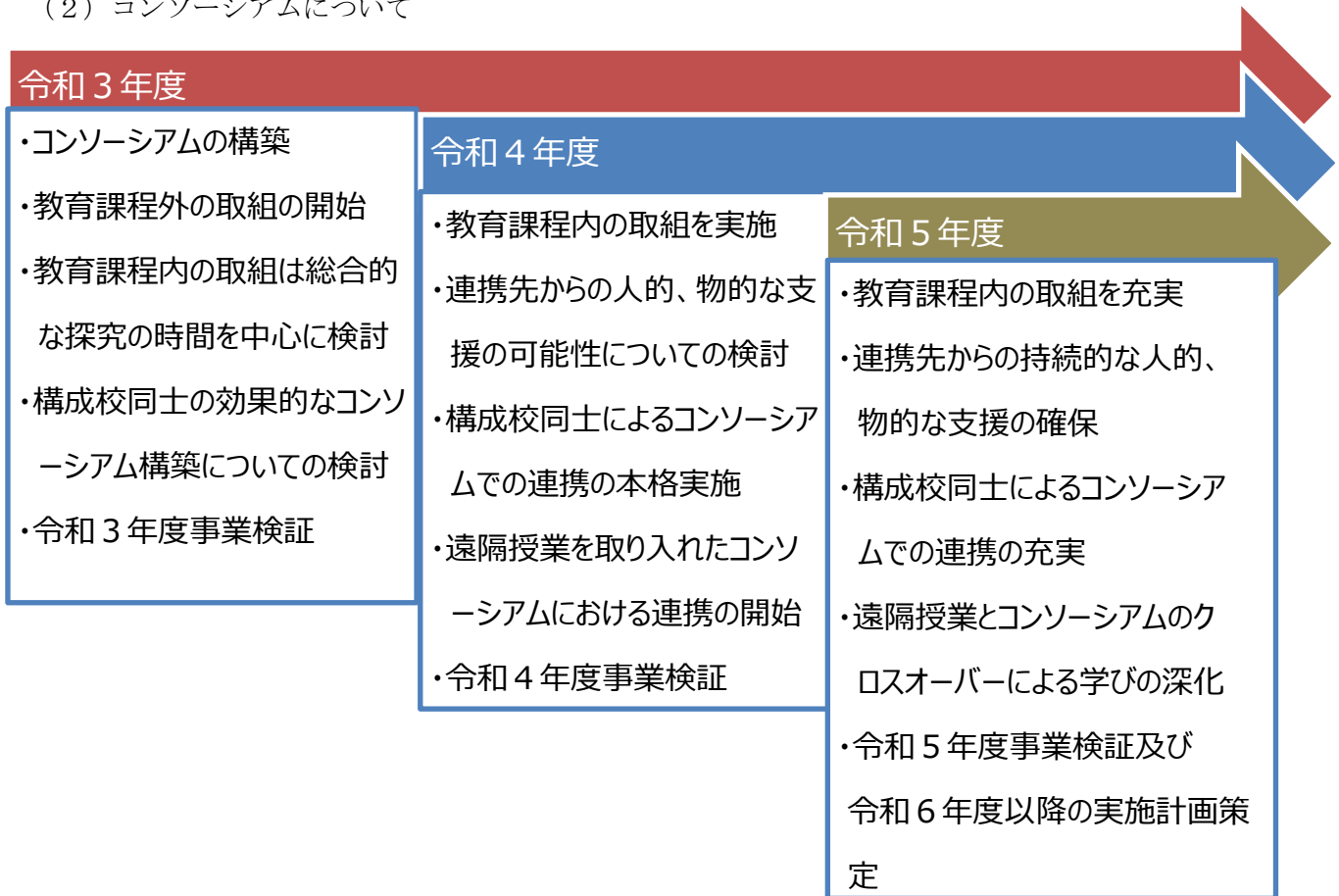
(1) 遠隔授業について



今後の計画

- 総合教育センター配信型の遠隔授業を継続しつつ、小規模校間や専門学科、総合学科を有する学校間の配信を拡大し、多様な選択科目の確保と教員の負担軽減の両立を目指す。
- 遠隔授業について教職員に広く周知していくため、総合教育センターでの研修の中で教員が遠隔授業について学んだり、実際に体験したりする機会を設け、学校間配信への理解を促進する。

(2) コンソーシアムについて



今後の計画

- ・本事業をとおして整理されたコンソーシアム構築のプロセスをもとに、1学年2学級以下の全ての小規模校において、地域コンソーシアムを構築し、地域と協働した学びを進める。
- ・本事業の構成校をアドバイザー校として、新たにコンソーシアムを構築する学校に対して助言できる体制を整える。

(3) 管理機関の役割

遠隔授業については、授業者となる講師の確保、効果的なICT機器やアプリケーションの整備を行う。また、遠隔授業の学習効果を定量的に検証し、効果的な配信の在り方について、学校及び授業者に指導・助言を行う。

コンソーシアムについては、構築の効果を定量的に検証し、必要であれば、連携先の公的機関等との仲介をしながら連携事業の充実を図るよう、学校に助言する。

いずれにおいても、令和6年度以降の持続的な実施を目指して検証を行う。特に、本来の目的である、小規模校の生徒の学びの充実が図られているか、学校の魅力化・特色化に結び付いているかということについて検証を行いながら、事業の内容を精査する。併せて教員の負担軽減につながっているかということについても確認する。

2. 遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組

2.1. 調査計画

(1) 「教科・科目充実型」の遠隔授業などICTも活用した連携・協働の取組

① 実験を含めた遠隔授業の通年実施について

遠隔授業においても、対面もしくはそれ以上の学習効果を保証する配信の在り方について検証する。具体的には、継続して実施する遠隔授業において、ICT機器を活用しながら探究的な学び、主体的・対話的な

学びの実践について研究する。

②遠隔授業で活用するICT環境の整備について

受信校においては、生徒一人に1台ずつ配備されたタブレット端末と大型ディスプレイの効果的な使い分けについて、総合教育センターにおいては、効果的な配信機器、アプリケーションの精査について、授業実践と学習評価を基に検討していく。

(2) 遠隔授業を行う運営体制の確立

総合教育センターの研究指導主事が主導する形で、効果的な遠隔授業の実施及び学習評価についての研究を行い、研究の成果を授業者に対して伝えながら、授業改善を図る方法を確立する。学習評価については、クラウドを活用した見取りや、遠隔授業システムを活用しながら妥当性のあるものとする。併せて、学習用プリントや考査問題の授受の方法、受信校での監督者の役割を明確にし、生徒の学習の充実を図る。

遠隔授業の実践は、ICT機器の活用という点で、対面で行われる授業においても有用な知見となると考えられるため、ここで得られた知見については、研修や各研究会などをおして全県の学校へ普及・還元していく。

(3) 多様な学びの質の保証と学校間配信

「観光」という共通したテーマの学びを進める構成校3校（内海高等学校、足助高等学校、福江高等学校）の連携を促し、先行して連携を進めている足助高等学校と福江高等学校が主導する形での3校間相互配信の実施をコーディネートする。その上で、生徒の意欲や観光についての理解の深まりを検証する。

2.2. 実施体制

本事業の遠隔授業の目的の一つとして、受信校の教員の負担軽減がある。したがって、受信教室には該当教科以外の教員または実習教員を配置してもよいこととする。

担当する教員に対して、遠隔授業システムについての操作、トラブル対応などの研修を十分に行う。また、さまざまな事案に対応できる緊急時の対応マニュアルを作成し、受信校における体制を整え、実習教員だけでなく、受信校の全ての教員に対して周知のための研修を行い、適切に対応できるようにする。

配信側と受信側、受信側同士の報告・連絡・相談をオンライン会議などにより密に行い、遠隔授業の際の注意事項、具体的な対応事例、生徒の情報などを共有する。また、共有した内容は定期的に、教育委員会、総合教育センター、各構成校の責任者、CIOに報告し、必要に応じて検討・改善を図る。

受信側の教室にいる者は、教授は行わないが、生徒の取組に対して指導を行う必要がある。今回指導を予定している教員または実習教員は、日頃から生徒との交流があり、指導・支援の経験もあるので、生徒は安心して授業を受けることができる。

愛知県では、令和2年度に各学校にICT機器の整備を行うとともに、構成校6校には生徒一人1台タブレットや大型ディスプレイの配備、通信回線の増強などを行った。これにより、各構成校においては、全学年全てのクラスにおいて生徒一人1台タブレットを活用とした学習活動が同時に展開できる環境が整っている。

また、Microsoft 365を県全体で契約し、生徒、教員ともに一人ずつアカウントを発行している。さらに、愛知県は日本マイクロソフト社と連携・協力に関する包括協定を締結しているため、オンライン学習の推進に関する協力を得ることができ、アプリケーションやサービスの活用に関する教員研修や教材の共同開発が可能である。本事業の遠隔授業システムについても、マイクロソフトのさまざまなアプリケーションやサービスの活用を予定している。具体的には、Microsoft Teamsを利用した双方向の音声、映像、データのやりとりが、遠隔授業においてどれくらい活用できるかについて検証する。さらに、生徒一人1台タブレットの配信側の教員による画面の確認、操作の制御等は、Sky Menu Cloudを導入して行う。

運営体制に関する取組として、遠隔授業については令和3年度に、総合教育センターを拠点とする遠隔授業の配信の際の人員の確保（配信側及び受信側）、構成校同士の遠隔授業の際の教育課程の共有化及び運営体制の構

築に取り組んだ。また、地域連携コンソーシアムの構築については、それぞれのコンソーシアムの設立、各構成校の教育課程に組み込むための検討、連携先との学習プログラムの構築に取り組んだ。令和4年度には、それぞれの取組を進め、年度末に検証・改善を図り、令和5年度の取組につなげるとともに、最終的に事業全体を総括する。事業終了後の令和6年度以降も継続できる体制づくりが目的である。

①事業推進連絡協議会等の実施

事業推進連絡協議会は、教育委員会、総合教育センター、構成校、CIOで構成し、事業全般についての進捗状況の報告、課題・問題点の検討、改善策の提案などを行う。年間3回程度は対面により開催し、月1回程度はオンラインにより開催する。

構成校の校内委員会は、管理職、担当教員で構成し、CIO、教育委員会の担当者、総合教育センターの担当者、地域連携コンソーシアムの関係者も必要に応じて参加する。校内における進捗状況の報告、課題・問題点の検討、改善策の提案などをテーマとして、月1回以上開催する。

構成校同士で連携する場合は、該当の構成校による協議会（合同校内委員会など）を行い、遠隔授業を行う教科・科目の検討、指導計画の作成、連携の具体などについて協議を行う。オンライン会議を基本とし、該当する構成校の判断により適宜行う。

②遠隔授業実施のための人員配置の検討

総合教育センターを配信側として行う遠隔授業を担当する教員の人員配置について、令和3年度中に県教育委員会で検討し、令和4年度から配置できるようにした。

③構成校への支援体制

CIO、教育委員会の担当者及び総合教育センターの担当者による指導・助言を適宜行うとともに、遠隔授業の実施については、日本マイクロソフト及びリクルートからの支援を受けた。愛知県は、日本マイクロソフトと連携・協力に関する包括協定を締結した。また、リクルートについては、教育支援サービスであるスタディ・サプリを、令和2年度及び令和3年度に愛知県全体で契約した。令和4年度も構成校6校については契約を行った。日本マイクロソフトは、Microsoft 365に関する教員研修、各種機能の提案など、リクルートは、スタディ・サプリに関する教員研修、各種機能の提案などの支援を行った。

2.3. 取組概要

(1) 定常的な実施

受信校	教科	科目	遠隔授業を実施した授業回数（対面授業を除く。）
足助	理科	生物基礎	64
田口	地理・歴史	地理A	12
新城有教館作手校舎	理科	地学基礎	64
新城有教館作手校舎	地理・歴史	地理総合	12

(2) 構成校による相互配信

「観光」についての学びを進める総合的な探究の時間

実施校：足助高等学校、福江高等学校、内海高等学校

月	実施内容
11月	地域の課題解決プロジェクト中間発表会
3月	探究交流

(3) その他遠隔授業に係る取組

月	実施内容
6月	観光をテーマに、県外の高校との交流授業（福江高）
12月	遠隔授業成果発表（総合教育センター）

2.3.1. 遠隔授業実施表

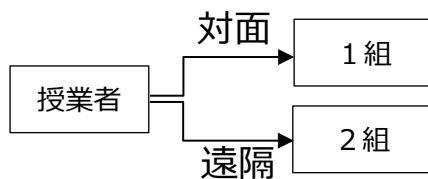
配信拠点	受信校	教科名	科目	開設学年	配信校生徒の有無	遠隔授業実施理由	受信側の配置体制	遠隔授業実施回数/全授業回数
足助高校 福江高校	内海	総合的な探究の時間	総合的な探究の時間	1、2	有	多様な教科・科目開設	教員	2/58
総合教育センター	足助	理科	生物基礎	1	無	専門性の高い指導の実施	教員	62/64
福江高校 内海高校	足助	総合的な探究の時間	総合的な探究の時間	1、2	有	多様な教科・科目開設	教員	2/60
足助高校 内海高校	福江	総合的な探究の時間	総合的な探究の時間	1、2	有	多様な教科・科目開設	教員	2/60
一宮西高校	新城有教館 作手校舎	理科	地学基礎	1	無	専門性の高い指導の実施	教員	62/64
総合教育センター	新城有教館 作手校舎	地理・歴史	地理総合	1	無	専門性の高い指導の実施	教員	11/12
総合教育センター	田口	地理・歴史	地学B	1	無	専門性の高い指導の実施	教員	11/12

2.4. 取組内容

(1) 実験を含めた遠隔授業の通年実施について

整備した遠隔授業の配信・受信システムにより、足助高校へ「生物基礎」、新城有教館高校作手校舎へ「地学基礎」を、通年で実施することができた。昨年度に引き続き今年度も、実験・実習を伴う授業を複数回実施することができた。遠隔授業で実験・実習を円滑に行うため、配信側の教員が受信校を訪問し、2クラスを対象とする実験・実習のうちの1クラスは対面で授業を行った。遠隔授業では、受信側の教員が当該科目を専門としていないため、1クラスについては配信側の教員が対面で指導することで、遠隔授業で実験・実習の課題点を洗い出すことができ、また、受信側の教員が指導のポイントを明確に理解できた。こうして実施した実験・実習を伴う授業は、対面と遠隔で生徒の理解度に差がないことが明らかとなった。(図2、3)

【実験・実習①】



【実験・実習②】

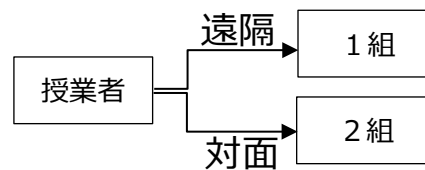


図2 実験・実習を効果的に行うための対面授業の平行実施

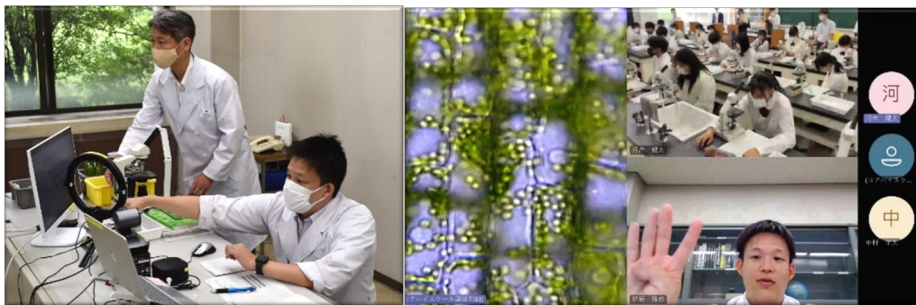


図3 遠隔授業による実験活動の様子

また、新城有教館高校作手校舎への「地理総合」、田口高校への「地理B」についても通年での実施を予定していたが、配信を行う教員の都合により年度の途中で実施できなくなった。

(2) 自由度の高い配信拠点の構築について

令和4年度までに実施した遠隔授業の課題として、配信側の教員の通勤に係る負担があった。本県では、愛知県の中心部にほど近い愛知県総合教育センターを配信センターとして、遠隔授業に必要な設備を整備した。遠隔授業を行う教員は様々な場所に居住したため、ある教員は片道1時間半を通勤に費やさなければならず、こうした状況は、今後の遠隔授業を持続可能なものにする上で大きな障壁となることが考えられた。

本県では、全ての県立高校の生徒及び教員に、タブレット端末としてMicrosoft Surfaceが整備されるとともにMicrosoftアカウントが発行されており、全ての教員がMicrosoft Teams等を利用することで、全ての生徒に、配信を可能とする体制が整備されている。そこで、令和5年度は、配信側の教員の最寄りの高校に配信拠点を移設し、年間を通じて配信を行う体制を整えた。移設にあたっては、タブレット端末に加えて、本事業で整備したモニターやマイクなど最小限の物品の移設となるように配慮した。

移設した配信拠点からの遠隔授業は、年間を通じて、総合教育センターから行うものと遜色なく実施することができた。新たに遠隔授業を実施する教員は、総合教育センターにおいて研究指導主事のサポート

を受けながら配信することが望ましいが、2年目以降には最寄りの高校から配信することで教員の通勤に係る負担を大幅に軽減できると考えられる。(図4)

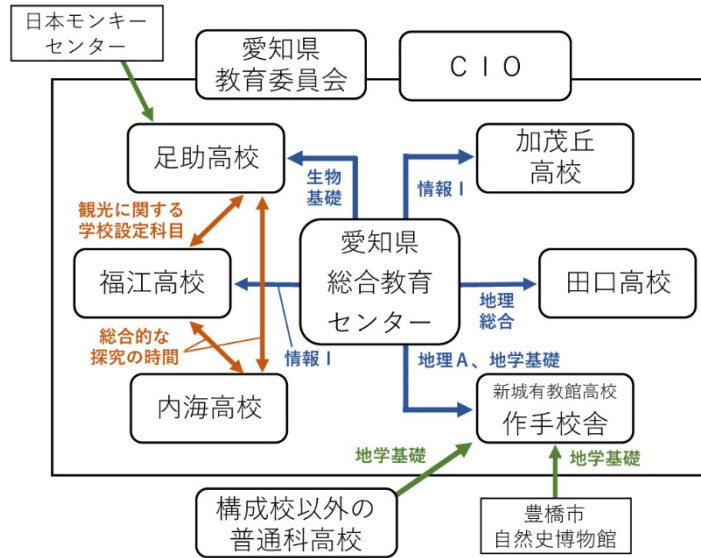


図4 自由度の高い配信拠点の構築と拡張型を含めた遠隔授業の実施概要

(3) 可能性を広げる拡張型の遠隔授業について

遠隔授業を対面により行う授業の代替とするだけでなく、遠隔の利点を最大限生かした、遠隔でしかできない学びについて研究する目的で、令和5年度は研究施設や博物館等の校外の施設からの配信を試みた。(表2、図5)

表2 校外の施設からの遠隔授業

高等学校名	配信施設	概要
足助	日本モンキーセンター	生物基礎の授業において、サルの様子を配信しながら、その形態の多様性についてキュレーターから説明を受けた。
新城有教館作手校舎	豊橋市自然史博物館	地学基礎の授業において、化石の成り立ちやその学術的な意味について学芸員から説明を受けた。その後、学芸員の指導のもと、生徒は学校で岩石の加工と化石の観察を行った。

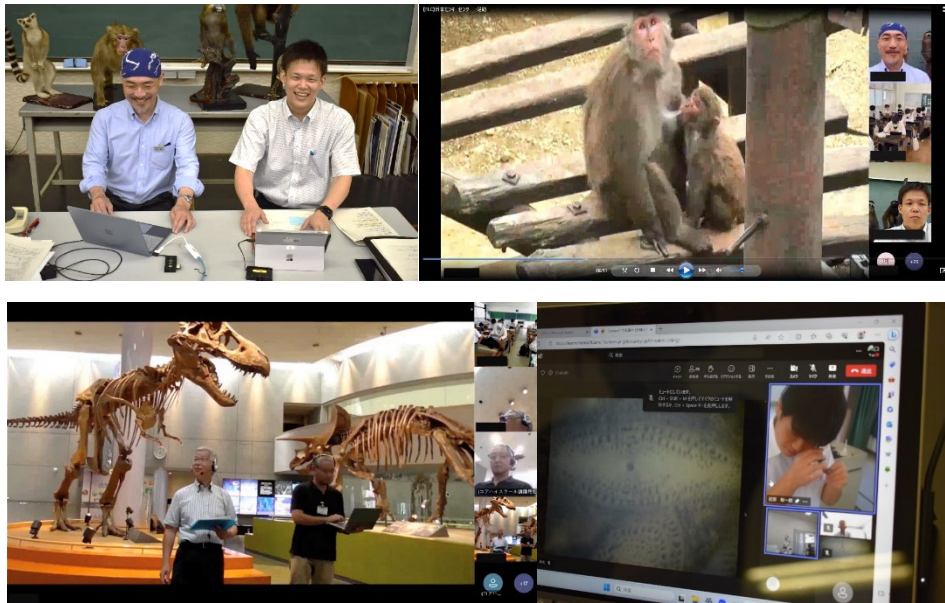


図5 学校外から配信する遠隔授業の様子

足助高校の「生物基礎」では、日本屈指の霊長類研究施設である日本モンキーセンターからの配信を行った。授業では、様々なサルをリアルタイムで撮影しながら、体のつくりの共通性や違いなどの観察のポイントについてキュレーターから説明をしていただき、生徒は生物の多様性について理解を深めた。動いているサルを実際に映し出すことで、教科書だけでは学べない生物の細かな特徴について理解することができた。

新城有教館高校作手校舎の「地学基礎」では、豊橋市自然史博物館からの配信と、それに伴う受信校での実験・実習を行った。館内の標本等の展示物を映し出ししながら、配信する教員と学芸員が生徒と対話しながら説明を行った。その後、教員と学芸員の遠隔での指導の下、受信校の生徒は実験・実習に取り組んだ。ここでは、約3億年前に生息したフズリナと呼ばれる微小な生物の化石を含む岩石を薬品で加工し、顕微鏡で観察した。その後、学芸員と対話しながら理解を深めた。

2.5. 考察

(1) 実験を含めた遠隔授業の通年実施について

授業者が受信側の学校に赴いて、機材の確認や受信側教員との打合せを実施することで、遠隔授業でも対面と遜色ない実験・実習を行うことができることが明らかとなった。本事業では、受信側には同教科で他科目を専門とする教員を配置していたため、このように打合せをしながら実験・実習を行うことは、授業の質を向上させるだけでなく、受信側の教員のスキルアップにもつながった。

一方で、こうした実施体制は、受信側の教員の負担を十分に軽減できていないことにもつながっていた。今後は、遠隔授業における実験・実習のマニュアル化等をおとして、受信側の教員の負担軽減を図る必要がある。

(2) 自由度の高い配信拠点の構築について

遠隔授業を拡充させる上で大きな障壁となるのは、配信に係るハード面の整備が必要だという固定概念が学校の中にあることである。全県に共通して整備されている最小限の機材によって、全ての県立高等学校を配信拠点とできること（以下、「ミニмумインストールモデル」）は、今後の配信側講師の持続的な確保に大きく貢献するものである。ミニмумインストールモデルによって、学校間配信を拡充し、まずは遠隔授業を実施する機会を増やすことが、将来の学びの質の向上と教員の負担軽減につながるものと考えられる。

また今年度は、一部の科目で、配信側の教員が年度の途中で退職することとなり、遠隔授業の継続が困難

となった事例があった。その際、新たに配信する教員を確保しようと試みたが、配信拠点である総合教育センターへの通勤による負担から、遠隔授業に意欲のある教員であっても実施を躊躇するという状況が見られた。こうした状況に対し、総合教育センターで1ヶ月間程度、遠隔授業を実施してノウハウを身につけた後、自宅から最寄りの学校等を配信拠点とするなど、配信拠点を柔軟に運用することで教員の確保を図っていききたい。

(3) 可能性を広げる拡張型の遠隔授業について

ミニマムインストールモデルは、全ての県立高等学校の教員に配備されているタブレット端末とインターネット環境さえあれば、配信する教員の工夫によってどこからでも遠隔授業が行えることを示すものであり、学校外からの配信の可能性を示唆するものである。本事業ではそうした可能性のもと、学校外の研究施設や博物館から遠隔授業を実施した。

専門家の解説を聞きながら、実際の生物や化石等の展示物をリアルタイムで配信することで、リアルな体験に近い臨場感が生まれ、生徒の興味・関心を飛躍的に高めることができた。また、遠隔授業で実施することで、生徒が現地まで赴くための時間や費用を省くことができる分、複数回にわたってこうした授業を実施できる可能性が見出された。たとえば、日本モンキーセンターは、生徒全員が実際に入園する場合、現地に向かうためのバスの費用や入場料を合わせると15万円程度の費用が必要となるが、遠隔であれば、配信する講師の旅費及び入場料のみで実施することができる。

2.5.1. 目標設定シートに対応した成果と課題

1. (1) 生徒の学力の定着・向上の状況について

全体として、Aが増加しCが減少したが、年間に実施した中の知識・技能の見取りを重視した分野ではAがわずかに減少した。知識・技能の定着においては、教師が生徒に直接声をかけ指示を出すなどのメンターとしての役割が大きく、今年度実施した遠隔授業ではそれが十分でなかった可能性がある。

2. (4) その他、管理機関が設定した成果目標

設定した項目は次の5点である。

- ①教員の説明・指示、教材の提示は明確であるか（音声など聴覚への情報、板書、プレゼンテーションスライドなどの視覚情報）
- ②教員と生徒のコミュニケーションは取れているか
- ③生徒の活動を教員が確認できているか
- ④生徒個人への指導ができているか
- ⑤授業以外の時間の生徒への対応（生徒の質問、課題の指示・確認）はできているか

C I Oによる評価の結果は次のとおりである。

①	②	③	④	⑤
A	A	A	B	A

生徒タブレット端末を用いて、資料等の提示、クラウドを活用した課題の提出や質問等を実施したことで、概ねAの評価であった。教員と生徒のコミュニケーションは、場面ごとに使用するアプリケーションを限定して上で、クラウドへの提出、フォームやチャットの利用によって、対面よりもよりコミュニケーションを円滑に行うことができたと評価された。一方、生徒個人への指導については、クラウドをとおして提出された課題等を返却することで個別の対応を行ってきたが、細かな部分の指導は対面に劣るところがあり、今後も研究を進める必要がある。

3. (3) 活動指標②：教科・科目充実型の遠隔授業以外の遠隔授業の取組数

構成校同士による総合的な探究の時間について本格的に実施することができた。また、免許外教科担任制

度の解消を目的とした学校間による遠隔授業を試行できたことは大きな成果であった。

3. コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組

3.1. 調査計画

(1) コンソーシアムの構築・運営

ア 構築プロトコルの標準化

令和3年度より各構成校で行ってきたコンソーシアムの構築及び地域連携に係る、学校運営協議会や推進委員会の設置に向けての、手順の共通事項をまとめる。具体的には、学びのニーズの把握、連携先の選定、連携先とのコンソーシアム構築に向けた手続き等について、共通事項や好事例をまとめる。

イ 管理機関の支援体制の在り方

各構成校のコンソーシアム構築についての成果を取りまとめ、共有する。連携開始後においては、連携が円滑に進んでいる学校の事例を参考として他校にも共有しながら、その普遍性について検証する。特に、地域からの人的、物的な支援増加の方策について検討する。

(2) 連携による学びの充実

ア 教育課程内の取組の充実

観光や福祉など特色ある教育課程について、専門的な深い学びが得られるよう、指導内容や評価について連携先が主体的に関わることを推進し、その上で指導と評価の充実について検証する。

イ 構成校同士のコンソーシアム化による充実

総合的な探究の時間において、観光という同じテーマで学習をする構成校同士が、年に複数回発表及び意見交換を行うことで、観光について学ぶことに対する生徒の意欲向上と新たなアイデアの発案が促進されたことを確認する。

3.2. 実施体制

地域連携コンソーシアムの構築について、各構成校の構想は次の通りである（表3）。

高等学校名	構 想
内海	観光に関する地域、構成校との連携
加茂丘	地域の再開発計画に関する地域との連携
足助	観光に関する地域、構成校との連携
福江	福祉、観光に関する地域、構成校との連携
新城有教館作手校舎	地域の環境（農業）に関する地域との連携
田口	地域の環境（林業）に関する地域との連携

表3 地域連携コンソーシアムの構築を計画している6校

いずれも、教育課程に組み込むための検討、連携先との学習プログラムの構築を令和3年度中に完了し、令和4年度に連携事業を開始した。地域社会がさまざまな課題と魅力を有していることに着目し、地域社会の歴史や現状に関する理解を深め、地域社会における課題や魅力の発見・課題解決に資する知識及び技能の習得と、習得した知識及び技能の活用に関わる思考力、判断力、表現力等の育成、また、自己の在り方生き方と地域社会のつながりを考えながら、地域社会の持続的な発展や価値の創出に関わり、豊かな人生を切りひらくための学びに向かう力、人間性等の涵養を目的とした。

各構成校では、これまでも地元自治体等や関係機関等との交流を行って、さまざまな取組を実施している。地元自治体等や関係機関等も地域唯一の高等学校である構成校を地域の大切な存在と捉えており、各校の教育活動に対して協力的である。このような現状を踏まえ、各構成校における、地元自治体等の関係機関等との地域協働に取り組むための工夫は次の通りとした（表4）。

高等学校名	地域との協働に取り組むための工夫
内海	<ul style="list-style-type: none"> ・イベント的であったこれまでの取組を、活動ごとに成果を総括し、評価を行った（大学や自治体職員等による外部評価を含む）。 ・地元自治体関係者を、教育課程の中（総合的な探究の時間など）での指導者として活用した。 ・遠隔授業システムにより、海域から離れた山間部にある学校とも、情報交換や情報共有を行った。
加茂丘	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでに近隣の藤岡地区（藤岡、藤岡南）で行っていた活動の範囲を広げ、小原地区、旭地区での活動も行い始めた。
足助	<ul style="list-style-type: none"> ・各団体などと協定を結び、ともに「Win・Win」の関係を構築し、事業を持続可能にした（「足助まちづくり連携協定」の締結）。 ・学校運営協議会及び外部人材組織（地域学校協働本部）の構築 ・豊田市「おいでん・さんそんプラン（令和3年3月策定）」の重点取組「高等学校の魅力化」に基づく、具体的な方策について検討した。
福江	<ul style="list-style-type: none"> ・令和3年度から、学校運営協議会を立ち上げ、コミュニティ・スクールとなった。その際、福祉、観光の関係者に協議会委員となってもらい、これまで以上に密接な連携を保ち、「社会に開かれた教育課程」の実践に取り組み始めた。
新城有教館 作手校舎	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携校推進委員会を本研究のコンソーシアムの中核とし、同委員会の提言を踏まえた取組を推進することで、中山間地域の教育資源を活用した質の高い中高一貫教育を実現した。
田口	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティ・スクールと地域学校協働本部を本研究のコンソーシアムの中核とし、徐々に地域からの協力者を募るように組織化し、コミュニティ・スクールの提言を踏まえた取組を推進することで、中山間地域における質の高い中高一貫教育を実現した。

表4 地域連携コンソーシアムの構築を計画している6校

地域連携コンソーシアムを構築する各構成校では、現在までにさまざまな地域連携の取組を行っているが、イベント的な取組が多く、生徒にどのような資質・能力が身に付いたかなどの検証が行われていなかった。そこで、本事業では、地域連携の取組を教育課程に取り入れることを検討し、実施した。

各構成校における地域課題解決に向けた探究的な学び（の一例）は次の通りである（表5）。

高等学校名	地域課題解決に向けた探究的な学び
内海	<ul style="list-style-type: none"> ・内海海岸などのプラスチックゴミを分析しながら環境問題について考察するなど、探究的な学びを行った（総合的な探究の時間の指導プログラムを策定）。 ・本事業の活動の一環である「南知多・美浜探訪」において地元観光産業の探究学習を進め、SNSや成果発表会において積極的に地域の魅力を発信するとともに地元に対する愛着を深めた。
加茂丘	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」において、藤岡地区の課題に主体的に取り組む、地域社会の一員であるという意識を醸成することをねらいとした「フジオカしかかたん計画」を立案し、モニタリングや現地調査、地域住民との意見交換を行うなどさまざまな活動を展

	<p>開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文芸部の活動で地域の名所や催しを題材にした「藤岡かるた」を開発して普及活動を進めたほか、家庭科の授業において隣接する小原地区の特産品を使った名物料理の商品開発に取り組んだ。
足助	<ul style="list-style-type: none"> ・観光ビジネスコースの学校設定科目「観光」の授業において、足助の町並みや地域の名勝である香嵐渓に脚光を当てた「小学校総合学習プロデュース」を展開し、「高校生ビジネスプラングランプリ」のベスト100に入賞した。 ・「足助まちづくり連携協定」に基づき豊田市役所足助支所や観光協会等各種団体と協働し、商標登録プロジェクトなどさまざまな企画に取り組んだほか、ラジオCMやミュージックビデオを制作し、SNS等で発信するなどのPR活動を展開した。
福江	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉、観光の関係者の指導を仰ぎながら、福祉実践コースと観光ビジネスコースの生徒が協力して、誰もが安心して施設・観光地を利用できるような紹介図や安心して観光できるようなコース等を作成した。 ・田原市の基幹産業である観光をテーマに、地域課題の解決方法を考える「ビジネス発表会」を開催したほか、地元の魅力を伝えるショートムービーを制作し、TikTok等で積極的に発信した。
新城有教館 作手校舎	<ul style="list-style-type: none"> ・「大地のめぐみプロジェクト」という名称で、準絶滅危惧種であるサギソウの人工栽培に取り組むことを通じて、地元の自然環境に対する理解を深めるとともに、中学、高校それぞれの生徒の成長を促す場となるような教育課程の研究開発を行った。 ・中高交流授業や地域連携部活動交流を定常的に実施し、作手地区の中高一貫教育を推進した。
田口	<ul style="list-style-type: none"> ・林業科のプロジェクト学習として、「スマート林業担い手育成事業」を進め、地上レーザー森林解析やドローン実習に取り組んだほか、杉の葉から抽出した成分を使った「森の香りを楽しむスギ石けん」を商品開発するなど、森林資源を有効活用したさまざまな取組を実施した。 ・国直轄で建設が進む設楽ダムの水路の流れを変える「転流式」において、田口町内の杉で制作した「祝い船」を流すなど、地域と協働した事業を展開した。

表5 地域連携コンソーシアムの構築を計画している6校

今年度、内海高校、足助高校、福江高校の3校間での遠隔授業を開始した。「総合的な探究の時間」などで、観光に関する取組や地域の魅力を伝える取組について相互に発表し合ったり、地域連携のノウハウ等を共有したりした。また、福江高校の生徒が貸切バスで足助高校を訪問し、現地において協働的な学習を展開したり、COREハイスクールの枠を越えて、足助高校と同じく観光に関する学びに特色のある鳥羽高校(三重県)を訪問して研修を実施したりするなど、遠隔授業で育んだ交流から派生したさまざまな取組を行った。

3.3. 取組概要

(1) 実施日程

月	実施内容
令和4年4月	構成校訪問指導（加茂丘、総合教育センター） 北設楽中高一貫教育推進委員会、校長会、教育課程部会（田口高） 地域連携の取組（支所講話・観光協会外部研修：足助高） （足助山ウォークボランティア：足助高） （中高連携推進校長会、中高連携推進部会：作手校舎） （中高一貫教育交流授業：作手校舎、田口高）
5月	学校運営協議会（足助高、福江高） 地域連携の取組（豊田市役所地域振興部職員招へい講座：加茂丘高） （校外美化ボランティア活動：足助高） （お仕事フェア2022（連携中学校と合同開催）：田口高） （大名倉環境学習（普通科）：田口高）
6月	第1回事業推進連絡協議会（全体会） 文部科学省、運営指導委員の視察訪問受入れ（総合教育センター） 学校運営協議会、ワーキンググループ会議（田口高） 北設楽中高一貫教育推進校長会、地域協力者会議、交流部会（田口高） 地域連携の取組（小学校総合学習プロデュース：足助高） （ジビエを学ぶ講義：足助高） （渥美商工会の講演、観光学習：福江高） （地域連携部活動交流（弓道部）：作手校舎） （大地のめぐみプロジェクト「サギソウの鉢上げ」：作手校舎） （中高一貫教育交流授業（数学・英語）：作手校舎） 観光をテーマにした県外の高校との交流授業（福江高）
7月	構成校訪問指導（作手校舎、総合教育センター） 北設楽中高一貫教育地域連携部会、部活動交流会（田口高） 地域連携の取組（足助地域会議との意見交換会：足助高） （校外美化ボランティア活動：足助高） （地元企業・県内大学・専門学校見学：足助高） （中馬街道足助宿ボランティア：足助高） （専門学校と連携した福祉に関する実技講座：福江高） （設楽ダムワークショップ、保全施設見学：田口高） （設楽町子どもセンター施設見学：田口高）
8月	地域連携の取組（小原名物料理の開発・審査会：加茂丘高） （「中馬のおひなさん」イベント企画打合せ：足助高） （校外美化ボランティア活動：足助高） （地元企業への就労体験：足助高） （地域と連携した介護実習：福江高） （大地のめぐみプロジェクト「サギソウの交配」：作手校舎） （地元中学生とのサマーセミナー（林業科）：田口高）
9月	第2回事業推進連絡協議会（全体会）

	<p>学校運営部会、観光部会（足助高）</p> <p>学校運営協議会（福江高）</p> <p>北設楽中高一貫教育地域連携部会（田口高）</p> <p>地域連携の取組（中山間地域一日バス研修ツアー：足助高） （地元企業と連携した農林業視察研修：田口高） （地域課題ワークショップ：田口高） （中高一貫教育交流授業（数学）：作手校舎） （農林業視察研修（林業科）：田口高） （寒狭川環境生態調査・講義（自然探究コース）：田口高）</p>
10月	<p>構成校訪問指導（足助、総合教育センター）</p> <p>学校運営協議会（足助高、田口高）</p> <p>地域連携の取組（足助ラジオCM制作：足助高） （足助高校ミュージックビデオ制作：足助高） （地域ボランティア福祉活動：足助高） （足助の訪問と体験：足助高） （探究学習プログラム発表会：足助高） （手話講習会：福江高） （中高一貫教育交流授業（数学）：作手校舎） （鳳来寺山自然科学博物館見学：田口高） （八橋湿地県境学習会（普通科）：田口高） （地元の保育園への訪問実習（林業科）：田口高） （スマート林業担い手育成事業（林業科）：田口高）</p>
11月	<p>北設楽中高一貫教育推進委員会教育課程部会、校長会（田口高）</p> <p>地域連携の取組（地元観光産業の探究学習：内海高） （「藤岡かるた」の地域イベント出展：加茂丘高） （店舗経営企画：足助高） （地元住民との香嵐溪ゴミ拾い：足助高） （郷土学習講演会：福江高） （レクリエーション講習会：福江高） （観光業者と連携したビジネスプラン発表会：福江高） （中高交流授業（数学・英語）：作手校舎） （大地のめぐみプロジェクト「サギソウの定植」：作手校舎） （外部機関や中学校との文化祭合同発表：田口高） （農産物公開販売実習：田口高）</p> <p>県外高校生への足助紹介ツアーアテンド（足助高）</p> <p>観光に関する学習を進める県外の高校への訪問研修（福江高）</p>
12月	<p>東三河中高一貫教育フォーラム（作手校舎）</p> <p>北設楽中高一貫教育推進委員会（田口高）</p> <p>地域連携の取組（地元観光産業の探究学習成果発表：内海高） （子ども食堂の調理補助とイベント企画：加茂丘高） （探究学習プログラム代表発表会：足助高） （地域住民とのクリスマスリースづくり：足助高）</p>

	<p>(足助の訪問と体験：足助高)</p> <p>(中高連携成果発表会：福江高)</p> <p>(コミュニティ・スクール発表会：福江高)</p> <p>(地元の中学生の一日高校体験学習：福江高)</p> <p>(点字講習会、保育園実習：福江高)</p> <p>(地域の方と語る会：福江高)</p> <p>(大地のめぐみプロジェクト「サギソウの無菌播種」：作手校舎)</p> <p>(サギソウチャレンジ (交流授業のまとめ)：作手校舎)</p> <p>(高齢者デイサービスセンター訪問実習：田口高)</p> <p>(公開講座「門松づくり体験講座」(林業科)：田口高)</p>
令和5年1月	<p>第3回事業推進連絡協議会 (全体)</p> <p>学校運営協議会 (足助高)</p> <p>北設楽中高一貫教育地域協力者会議、地域連携部会 (田口高)</p> <p>地域連携の取組 (課題研究発表会：足助高)</p> <p>(中高一貫教育交流授業 (数学・英語)：作手校舎)</p> <p>(事業所への訪問及びインタビュー：田口高)</p> <p>(スマート林業担い手育成事業 (林業科)：田口高)</p>
2月	<p>学校運営協議会ワーキンググループ会議 (田口高)</p> <p>地域連携の取組 (南知多町との来年度の構想・協議：内海高)</p> <p>(ツール・ド・フジオカウォーキングの協働運営：加茂丘高)</p> <p>(「中馬のおひなさん」参加店舗SNS紹介：足助高)</p> <p>(「知己の課題解決」発表会：足助高)</p> <p>(設楽ダム転流式「祝い船」制作 (林業科)：田口高)</p>
3月	<p>学校運営協議会 (福江高、田口高)</p> <p>北設楽中高一貫教育推進委員会教育課程部会 (田口高)</p> <p>地域連携の取組 (地域の有識者から学ぶ「働き方講座」：福江高)</p> <p>(林業関係現地見学会 (林業科)：田口高)</p> <p>(地域課題学習まとめ発表会：田口高)</p>

(2) 運営体制に関する取組

① 事業推進連絡協議会

令和3年度と4年度は年3回、令和5年度は次のとおり4回、事業推進連絡協議会を対面形式で実施した。参加者は、各構成校の主担当者、県総合教育センターの研究担当の研究指導主事、教育委員会の担当者、CIOである。

令和5年度の開催日程

- ・ 第1回 令和5年6月28日 (水)
遠隔授業及び地域連携コンソーシアムの実践報告と課題の共有
- ・ 第2回 令和5年10月24日 (火)
地域社会に根ざした持続可能な教育システムの普及に向けての研究協議
- ・ 第3回 令和5年11月17日 (金)
愛知県総合教育センター研究発表会の準備・リハーサル
- ・ 第4回 令和6年1月19日 (金)

研究成果のまとめと地域社会に根ざした持続可能な教育システムへの提言

② 愛知県総合教育センター研究発表会における成果発表

12月1日（金）に実施した愛知県総合教育センター研究成果発表会において、本事業の3年間の研究成果発表を行った。全ての県立高等学校と参加希望のあった県外の教育機関、関係企業、教職を目指す大学生等を対象としてオンラインで実施した。参加者からは、具体的な運用や今後の見通しなどについて質問が寄せられるなど、本事業の研究成果の普及・還元を行うことができた。

③ 文部科学省・内田洋行とのオンライン会議

- ・ 第1回実証地域連絡会議（対面） 令和5年8月3日（木）
- ・ 第2回実証地域連絡会議（オンライン） 令和5年11月24日（金）
- ・ 成果報告会 令和6年1月30日（火）

(3) 市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

各構成校におけるコンソーシアムを構成する団体とコンソーシアムの構築状況は、以下の通りである（表6）。

高等学校名	コンソーシアムを構築する構成団体	コンソーシアムの構築状況
内海	南知多町役場	学校運営協議会を設置
	美浜町役場	
	愛知県立内海高校	
	愛知県立足助高校	
加茂丘	豊田市役所（各支所）	学校運営協議会の設置を検討中
	地区交流館（藤岡、藤岡南、小原）	
	地区中学校（藤岡、藤岡南、小原）	
	地区商工会	
	地区観光協会	
足助	豊田市役所 足助支所	学校運営協議会を設置
	足助まちづくり協議会	
	豊田市足助観光協会	
	三州足助公社	
	足助商工会	
	一般社団法人おいでん・さんそん	
	愛知県立内海高校	
	愛知県立福江高校	
福江	田原福祉グローバル専門学校	学校運営協議会を設置
	渥美商工会	
	社会福祉法人 福寿園 渥美福寿園	
	社会福祉法人 田原市社会福祉協議会	
	愛知県立足助高校	

	愛知県立内海高校	
	渥美半島観光ビューロー	
	田原市子育て支援課	
	田原市商工会	
	田原市教育委員会	
新城有教館 作手校舎	新城市教育委員会	中高一貫教育推進委員会（校長会、部会）を構築
	東三河教育事務所新城設楽支所	
	新城市立作手中学校	
田口	設楽町役場	北設楽中高一貫教育推進委員会（校長会、地域協力者会議、地域連携部会、教育課程部会）を構築
	東栄町役場	
	豊根村役場	
	東三河教育事務所新城設楽支所 設楽教育指導室	
	設楽町立設楽中学校	
	設楽町立津具中学校	
	豊根村立豊根中学校	
	東栄町立東栄中学校	

表6 各構成校におけるコンソーシアムの構築

3.3.1. 地域と協働した取組実績

令和5年度における各構成校の取組は、以下の通りである（表7）。

高等学校名	令和5年度の取組実績
内海	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の観光産業（知多半島全体）の探究学習 ・内海高校公式Instagramでの活動内容の配信 ・南知多町観光協会と協働した地域の観光産業（日間賀島）の探究学習 ・町役場と協働した地域の観光産業（南知多町・美浜町）の探究学習
加茂丘	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な探究の時間において、地域の再活性化を実現するための事業案を企画、提案 ・ウォーキング企画を協働運営するなど地域行事に積極的に参加 ・地域の名所や催しを題材にした企画を開発し、普及活動を推進 ・当該地区に隣接する中山間地域の特産品を使った名物料理の商品開発を実施 ・校内委員会、構成団体との打合せを実施
足助	<ul style="list-style-type: none"> ・「小学校総合学習プロデュース」準備のための足助散策 ・足助観光協会による足助の町並み案内

	<ul style="list-style-type: none"> ・「探究学習プログラム」 豊田市地域振興部足助支所講話 ・「探究学習プログラム」 足助観光協会 講話 ・足助スタディツアー ・第1回足助人(あすけっと)活動交通安全啓発活動 ・ラジオCM制作プロジェクト ・高校生トラベル® 小学校総合学習プロデュース ・山村地域視察ツアー ・ミュージックビデオ制作 ・第2回足助人活動 福祉活動(地域ボランティア活動) ・ラジオCM制作プロジェクト 完成披露会 ・第3回足助人活動 生徒と地域住民によるクリスマスリースづくり(地域ボランティア活動) ・豊田市山村バスツアー企画下見・外部研修 ・「中馬のおひなさん」参加店舗のSNSを利用した紹介
福江	<ul style="list-style-type: none"> ・泉ダゲーナ、あつみ編集舎との連携授業を開始(観光) ・渥美商工会による観光講話観光 ・田原福祉グローバル専門学校による福祉実習前講習、入浴実習講座、介護実習 ・福祉法人による手話講習会、点字講習会 ・地域保育園と協働した保育園実習 ・田原市パシフィックロータリークラブの例会にてビジネスプラン発表 ・福江中学生一日高校体験 ・みんなのあつみカフェの定例会にてビジネスプラン発表
新城有教館作手校舎	<ul style="list-style-type: none"> ・中高交流授業 ・検定交流(実用英語技能検定を中高合同で実施) ・大地のめぐみプロジェクト ・地域連携部活動交流(弓道部) ・体育大会交流(中学生が高校の体育大会のいくつかの種目に参加) ・文化祭交流(作中祭に学校紹介パネル展示、生徒作品展示)
田口	<ul style="list-style-type: none"> ・中高交流授業 ・奥三河パワートレイル コース整備(ボランティア参加) ・中高サマーセミナー ・国交省設楽ダム工事事務所田内系統保全施設見学・

	<p>寒狭川環境生態調査・講義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農林業視察研修(緑の学園研修) ・設楽町子どもセンター施設見学 ・全校と連携中学校合同 お仕事フェア2023 ・保育園訪問実習 ・地域産業専門講座・山間地における鳥獣害の実態と対策 ・関谷醸造に納める「杉玉」製作
--	--

表7 各構成校における令和5年度の取組

3.4. 取組内容（各校の抜粋）

足助高校の取組



地域課題探究講座



地域と協働した福祉学習



地域協働イベント「中馬のおひなさん」



地域協働最終発表会



高校生トラベル山村ツアー

内海高校の取組



地域と協働した観光についての学習



他の構成校との合同授業

加茂丘高校の取組



地域と協働した名物料理の開発



地域交流企画「ツール・ド・フジオカウォーキング」



地域連携企画「ふじおか子ども食堂」

田口高校の取組



高天原39号 2023年9月

田口高校の紹介

普通科

普通科コース(文系)
自然探究コース(理系)

国公立・私立四年制大学、短大、専門学校への進学や、公務員、民間企業就職など、幅広い進路希望に対応します。希望や適性に応じた科目選択ときめ細やかな少人数指導により学力を確実に伸ばすことができます。

八幡沼地観祭会 (5月22日)
遠縁の専門家の指導を受け、奥三河の豊かな自然を学びました。

林業科

森林科学コース
地域文化コース

林業をはじめとする農林や、自然環境・地域の生活・文化を、実習を通して学びます。林業や製造業だけでなく、福祉、動物や農産物販売、幼児教育など幅広い職業を志すことができます。

鳴山演習林実習
各学年2部、3年間計約6回の総合実習では、林業と自然との絆を深めます。

田口高校 一日体験入学

田口高校の学びの特徴や、卒業後の進路状況などのプレゼンテーションのあと、希望する学科に分かれ模擬授業を体験しました。普通科では英語のコミュニケーションゲームや数学の確率の実験を、林業科では鹿(かな)の体験や新聞紙を使ったエコバッグ作りを行いました。また、田口高校生によるクエストタイムや希望者への簿記実習の見学も行いました。

林業科の映像で、さまざまな職業をマスターし、一つ一つの作業を大切に行っていることがわかりました。思いをもって物事に取り組んでいることがよくわかりました。田口高校の生徒を見ていて、影響や励みを受けることができました。クエストタイムでは、おもしろいと思えるように工夫されていることも楽しかったです。(駿東中)

どちらの科でも、進学や就職など、個人の将来にあった選択ができるのだということがわかった。また、日本に3台しかない特殊な機械が田口高校にあることを知り、すごいと思った。田口高校のことを前よりもよく知ることができた。(豊根中)

頑張れ！ 田口高校生

地域と密接に繋がっているのも田口高校の特徴です。小さな高校ですが、生徒はさまざまな取組に挑戦しています。応援をお願いします。

地域の学校を見に行こう！

コロナ禍で中止されていた文化祭等の公開が再開されます。この機会にぜひ地域の学校を訪れ、生徒を応援してください。
※ 内容は変更される場合があります。詳細は各学校にお問い合わせください。

躍進！ソフトテニス部

とにかくテニス大好き！
7月31日の全三河大会兼三河予選で団体6位を勝ち取りました。今一番熱いのが男子チームです。今後の活躍を期待してください。

地域を継続観察中

理科部の今年のテーマは、青少年ネコギギを調べること。豊川川の環境観察施設を回り回り観察し、その生息を学んでいます。文化祭での発表をお楽しみに！

奥三河の魅力を写真で発信

写真部は奥三河観光振興事務所主催「奥三河の魅力発信会」に参加し、奥三河を紹介する写真展覧会に取り組みました。作品は奥三河観光協議会のSNSで公開されます。

パワートレイルの成功にむけ

奥三河パワートレイルの新コースの整備に、田口高校生有志11人が取り組まれました。選手が楽しく走れるよう、田口新緑を汗みれに切り拓きました。

設楽中学校 学校祭	豊根中学校 豊煌祭	東栄中学校 明神祭	田口高校 文化祭	津具中学校 合唱発表会
10月28日(土) 9:00~12:30 奥三河総合センター	10月28日(土) 9:00~12:00	10月28日(土) 8:45~14:00 東栄中学・北島会館	11月2日(木) 10:00~14:30	12月3日(日) 13:30~15:40 つくぐグリーンプラザ
サマーセミナーや市内研修などの「総合的な学習の時間」の発表や、全校や学年ごとの企画も行いました。豊楽中学校の生徒が一生懸命取り組んでいる姿をぜひ会場でご覧ください。	総合的な学習の時間の発表では、「豊根進化」をテーマにプロジェクトの成果発表をします。また、クラスの色が出る学年発表、心に響く合唱なども行います。全校生徒が心と力をひとつにして盛り上げます。	午前には学校に「地域に学ぶ」「地域に生きる」「社会に生きる」をテーマに、学年ごとに共生タイムのまとめを発表します。午後は花袋会館に会場を移し、全校でつくり上げた合奏を披露します。	午前にはクラスや文化部、PTAなどが趣向を凝らした企画でお客様をおもてなします。午後は体育館で発表会を行います。久しぶりの一般公開を全校で盛り上げます。なお、豊根特別支援学校山崎教室も一緒に行います。	すべてに「津具中最後」の校歌がつけますが、それに調音する津具中生の全力の姿をお見せします。全校合唱、学年合唱、会場全員での校歌斉唱など皆さんの心に歌声を届けます。
☎ 0536-63-0123	☎ 0536-85-1344	☎ 0536-76-0071	☎ 0536-62-0575	☎ 0536-83-2029

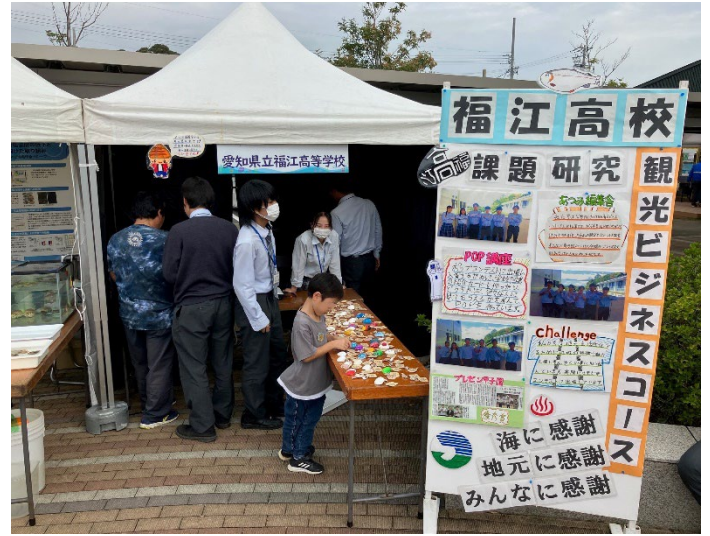
連携中学校との交流・協働



地域と協働したキャリア教育

地域のコミュニティバスの無償提供

福江高校の取組



地域と協働したビジネスプラン発表会



福祉実践講座

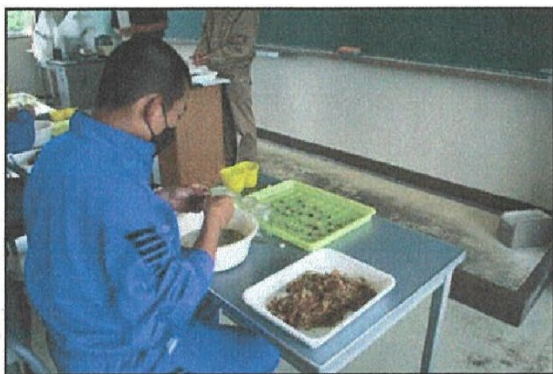


地域と協働したキャリア教育



地域の中学生と協働学習

新城有教館高校作手校舎の取組



中学校と協働したサギソウ鉢上げプロジェクト



作手っ子元気事業



地域と連携した進路学習



新城設楽農林水産事務所と連携した農業学習

3.5. 考察

(1) コンソーシアムについて

前年度までの取組を活かし、さらに発展させたさまざまな活動を展開することができた。

① 教育課程内の学びの充実

コンソーシアムを構成する公的機関や企業のそれぞれが外部機関とのネットワークをもっており、そうした外部機関との連携が広がっていくことで、学ぶ意欲の高い生徒が、放課後等にも主体的に活動できる場が提供されるなど、学びの質の向上につながった。コンソーシアムを通じた取組によって、総合的な探究の時間で系統的な学習計画が立てられるとともに、2週にわたる「探究週間」を開設する構成校があるなど、探究的な学びが拡充するなどの成果があった。また、その評価にはルーブリックを活用した生徒の見取りが活用されている。

また、福祉についての学校設定科目を開設している学校では、連携先と協働で授業内容や評価方法などの指導計画を開発する取組も始まり、今年度の大きな成果となった。

② 連携先からの支援の拡充

学校が必要としている人的、物的資源について連携先に具体的に伝えることで、講師となる人材の派遣、移動のためのバスの提供など、自治体等から様々な支援を得ることができた。いずれの場合においても、学校が必要としていることを連携先から提供してもらうことは、将来的に地域の活性化につながっており、学校が主体的に連携先に意思表示することは、学校と外部機関の連携を円滑に進める上で非常に重要であることが明らかとなった。コンソーシアムの構築当初は、連携先の多くがコンソーシアムの目的や学校のニーズを正確に把握できていなかった。地域の活性化、学校の魅力化・特色化を目指すという共通の目的を明確にして連携事業を進めることが重要であり、そのために管理機関も必要に応じて支援をしていく必要がある。

(2) 遠隔授業とコンソーシアムの相乗効果について

① 「観光」についての学びを行う学校間でのコンソーシアム構築と遠隔授業の実施

足助高校、福江高校、内海高校の3校は、それぞれの地域に観光資源が充実しており、観光に関するカリキュラムを設定している。3校は、それぞれが地域の公的機関、企業等とコンソーシアムを構成しているが、愛知県ではこれらの学校同士でもコンソーシアムを構成し、観光についての学びの深化を図る取組を行ってきた。まず、観光に関するコースを設置している足助高校と福江高校の2校による相互配信での遠隔授業について、令和3年度から試行を行い、その可能性を検討してきた。令和4年度にも、3校での相互配信による遠隔授業を試行的に実施した。そこで得られた知見を基に、総合的な探究の時間で観光についての学びを行う内海高校が令和5年度に本格参加して3校体制での学校間コンソーシアムを構成することができた。

② 成果

学校間での相互遠隔授業をとおして、いずれの学校においても生徒の学びに対する意欲が高まったことが、アンケート等の結果から明らかとなった。学校が構成する一般的なコンソーシアムでは、地域の大人からの支援を受けて学びを充実させるものであるが、学校間でコンソーシアムを構成し、他校の生徒と定常的に交流することが学習意欲の向上に寄与する可能性が見出された。

3.5.1. 目標設定シートに対応した成果と課題

コンソーシアムの構築による地域連携については、地域連携の取組を教育課程に組み込んだ学習プログラム(科目の一部でも可)の数において、計画を大きく上回る約40の学習プログラムを実施することができた。また、地域から計画を上回る支援を受けた事例も複数見られた。

その反面、構成校同士を結んだ、あるいは地域連携に関する合同授業型、教師支援型の遠隔授業も含めた遠隔授業の実施数については、計画していた30の学習プログラムを実施することができなかった。研究を進める中で、構成校のそれぞれが地域連携等に係る新たな取組を始めたことや、新型コロナウイルス感染症の感染法上の

位置付け変更などにより、地域連携が対面により実施されることが多かったことなどの理由で、構成校同士や地域連携に係る遠隔授業を十分に拡充できなかった。構成校同士の遠隔授業の適切な実施回数については、今後、精査していく必要がある。

4. まとめ

(1) 効果的で持続可能な遠隔授業の実施について

受信校の生徒に対して行ったアンケートでは、6割以上の生徒は遠隔授業を肯定的にとらえており、そのニーズが高いことが明らかとなった。(図6)

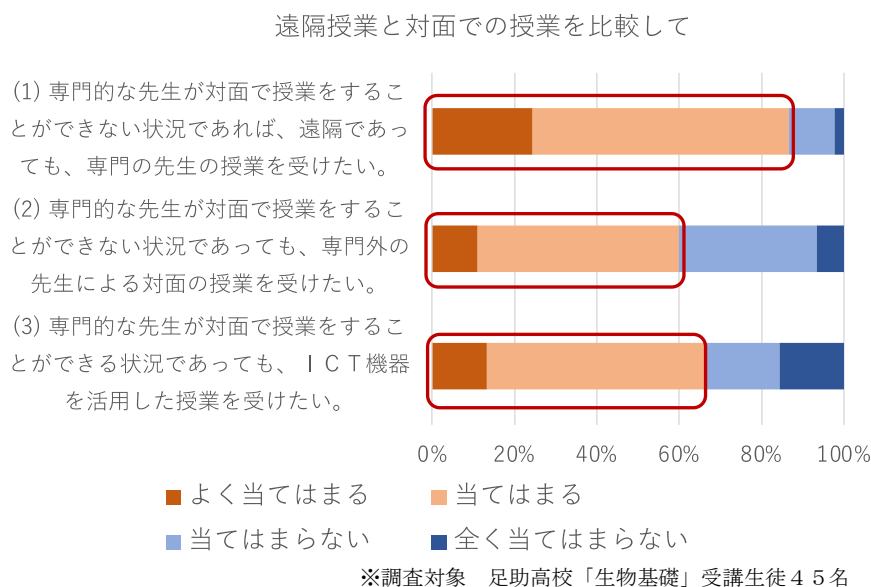


図6 生徒アンケートの結果

実験・実習を伴う授業については、配信側の教員と受信側の教員が事前に綿密な打合せを行うことで、対面と同等の内容を実施できることが実証された。また、実験・実習を伴う科目では、受信側の教員がその趣旨を理解し、適切に生徒を指導できることが重要であることから、実施する科目と同じ教科の教員であることが望ましいことも明らかとなった。

学校外の研究機関等からの配信を通じて、対面以上の学習効果をもたらすことができることも明らかとなった。この取組は、実際に生徒が研究機関等へ赴いて学ぶ場合に比べて、費用を大幅に抑えられる利点もあり、持続可能で質の高い学びを保障する上で非常に貴重な知見となった。

また、特段の設備のない構成校以外の学校からの配信では、配信側の教員が遠隔授業に熟達していれば、県総合教育センターと同程度の遠隔授業の実施が可能であることが明らかとなった。従来、配信側の教員が県総合教育センターまで長距離の移動をしなければならいことが大きな負担となっていたが、配信側の教員が移動しやすい学校を配信の拠点とすることで移動負担を軽減することができ、講師の安定的な確保につながると考えられる。また、遠隔授業のベースとなるアプリケーションをMicrosoft Teamsに統一することで、本研究で得られた知見を今後も活用しながら、遠隔授業を実施する基盤を構築することができたと考えている。

(2) 学校間連携を行うための運営体制に関する取組

「観光」という共通した学びを進める内海高等学校、足助高等学校及び福江高等学校において、遠隔授業も活用した学校間連携を進めた。教員同士の打合せを、遠隔授業で利用しているMicrosoft Teamsを使って不定期で開催し、情報共有を行うとともに、生徒同士の意見交換や合同成果発表会を実施した。こうした取組の中で、地域の観光資源をSNSで発信した成果や、学校が地域と協働した事例が共有されたことがきっかけとなり、新たなプロジェクトが立ち上がった事例も見られた。これは、地域コンソーシアムを通して得

られた知見を、地域を超えて共有する、仮想的な「大コンソーシアム」を構築できる可能性を示したものである。今後、各コンソーシアム間での連携について、さらに研究を進めていく。

(3) 市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

本事業の構成校が実施した探究的な学びの多くは、地域との協働によってはじめて実現できるものであった。コンソーシアムの構築で重要なことは、学校のニーズを地域に明確に伝えることである。地域の様々な機関が学校の教育活動に協力したいと考えているが、互いが遠慮し、形式的なコンソーシアムとなってしまうのは学びの充実は実現しない。「地域で子どもを育てる」という共通目標をもった共同体としてのコンソーシアムとする必要がある。

また、探究的で質の高い学びを保障していくためには、地域からの人的、物的な支援を得ることが、小規模校だけでなく、全ての学校で必要なことである。そうした中、コンソーシアムという形で連携の在り方を明確にすることが、支援を獲得する上で非常に有効であると考えられる。

5. 次年度に向けた計画概要

(1) 遠隔授業

① 学校間配信の継続

特設の設備のない構成校以外の学校からの配信では、配信側の教員が遠隔授業に熟達していれば、総合教育センターと同程度の遠隔授業の実施が可能であることが明らかとなったため、令和6年度には、本事業で遠隔授業を実施した配信側の教員が、自宅から近い県立高校を配信場所として引き続き遠隔授業を行う予定である。

② 遠隔授業に関する研修の充実

令和6年度より、不登校生徒を対象とした遠隔授業による単位認定が開始されるなど、今後、遠隔授業は多様な学習ニーズに対応した教育の重要な要素の一つとなる。そこで、遠隔授業の実施と併せて、県立学校の教員が遠隔授業について知る機会が得られるよう、遠隔授業の仕組みを学んだり、実際に遠隔授業を経験できたりする研修を総合教育センターと協働して実施することで、遠隔授業を行える教員の確保に努める。令和6年度初任者研修及び中堅教諭等資質向上研修において、遠隔授業を取り扱う時間を研修プログラムに取り入れ、令和7年度以降の本格な実施を目指すことを検討する。

(2) コンソーシアム

① コンソーシアム構築プロセスの共有

地域協働のためにコンソーシアムを新たに構築する学校に対して、本事業で明らかとなった構築に必要なプロセスを共有できるよう、「コンソーシアム構築マニュアル」を作成し、学校に配付できるようにする予定である。また、本事業の構成校6校をコンソーシアム先進校として、構築に伴って発生する細かな事項等について先進校に相談できる体制を整備することを考えている。

② 地域連携プログラムのアーカイブ化

本事業では、計画を大きく上回る地域連携プログラムを実施することができた。それらのプログラムを、活動内容や連携の仕方などで分類して整理し、ウェブ上もしくは紙面上でアーカイブ化する。それによって、新たにコンソーシアムを構築しようとする学校が、活動の参考とできるようにする予定である。

(3) 遠隔授業を活用したコンソーシアムの充実

本事業では、「観光」という共通した学びを進める内海高等学校、足助高等学校及び福江高等学校において、遠隔授業も活用した学校間連携を進めた。この取組の中では、地域の観光資源をSNSで発信した成果や、学校が地域と協働した事例が共有されたことがきっかけとなり、新たなプロジェクトが立ち上がった事例も見られ、地域コンソーシアムを通して得られた知見を、地域を超えて共有する、仮想的な「大コンソーシアム」

ム」を構築できる可能性を示したものであった。

こうした取組を専門学科や総合学科を有する学校に拡充していくことを考えている。例えば、看護や福祉についてのカリキュラムを有している学校は少なく、従前より教員の確保が課題となっているが、遠隔授業を活用することで教員数の少ない教科・科目においても充実した学びを保障できる可能性がある。また、看護や福祉に関する科目を開講する際は、実習等で地域連携をする機会が多いため、そうした学校同士が知見を共有することで、上記に示した仮想的な大コンソーシアムの可能性が広がることを想定している。